

OPU Students 海外留学レポート

Study Abroad Report from the OPU students

プロフィール (Profile)

氏名 (Name) S.I

所属 (School) 人間社会システム科学研究科博士
後期課程

学年 (Grade) D3

留学先 (Name of overseas institution) 北京大
学

留学期間 (study abroad period)
2019/8/23~2019/8/27

記入日 (Date) 2019/9/1



留学レポート Study Abroad Report

2019/8/24~2019/8/25 に北京大学外国語学院で開催された「写本文化国際シンポジウム」で発表の機会を戴き参加した。さらに大形徹先生の配慮により、北京大学芸術学院の李松先生、中国社会科学院世界宗教研究所の汪桂平先生の両研究室を訪問し数々の指導を受けることが出来た。現地の様子などを含め報告する。



北京大学の入口



北京大学構内の未名湖と塔

北京大学構内に入るには、セキュリティが厳しく警備によるチェックを受けなくてはならない。北京大学は観光地となっているようで、構内に入ろうとする人たちが入口は混み合っていた。私たちは事前に配布された「写本文化国際シンポジウム」の参

加証を持っていたので、すんなりと入ることが出来た。大学構内は非常に広大で、府大池とは規模の違う未名湖と言う湖や、塔などがあり大変美しい。この中に各学院（学部）が散在する。

シンポジウム前日、大形先生とともに、芸術学院の李松先生の研究室を訪問した。木々の中にクラシカルな雰囲気のある外観のある建物の中にあった。李松先生の専門は、道教美術、仏教美術である。私は、疾病を引き起こす病因としての「蟲」を研究としている。これらは、日本では室町~江戸時代に図として描かれた。明治以前、主に中国からの医学を受容してきているが、この「蟲」に相当する物が、中国でも存在していたか否かがという疑問があった。今までのわが国の論文においては日本の中世医学は僧侶によって行われることが



芸術学院の入口



陳明先生と

多く宗教性があると言われていた。そこで今回、道教及び仏教美術の第一人者である李松先生に、私の原稿や、資料を提示し見ていただき、その疑問に対するご意見を伺うことが出来た。李松先生の話では、「蟲」の図は、(中国に)



シンポジウムの様子

あるかも知れないが見たことがない」とのことであった。さらに「共同調査している陳明先生なら知っているかも知れない」とのことであった。この陳明先生は、今回のシンポジウムの主催者である。この日の夕食時、李松先生や、陳明先生はじめシンポジウムに参加される多くの先生方とお会いすることが出来た。ここでも「蟲」に対する疑問をお尋ねし、また私の研究に対し提示する機会を持つことが出来た。陳明先生も、先の李松先生と同様の意見であった。また同席されていたドイツを初めとする他の国の研究者からも強い関心を持って頂いた。ただ私の語学力があまり

に拙いため本研究についての説明と討論が十分に出来なかったことが悔やまれる。いずれの研究者も非常に中国語が堪能であった。これからの研究には、英語のみならず中国語が必要だと強く感じた。

シンポジウムでの発表も無事終わり、2日間の国際学会は閉幕した。



中國社會科學院



中國社會科學院世界宗教研



中國社會科學院汪桂平先生と研究員



道教医学の研究者と

最終日には、大形先生とともに中国社会科学院の汪桂平先生の研究室を訪問した。汪桂平先生は道教の研究者である。研究員の方々と交流をした。中でも道教医学の研究者がおり、私の研究を大変興味を持ち聞いてくれた。さらに彼は、北京白雲觀の中に有る道医に連絡を取ってくれた。白雲觀にある「修真図」は私の研究対象である書の中で、解剖図として扱われる。突然にもかかわらず汪桂平先生、大形先生とともに早稲田大学に



留学経験のある研究員、王肯月先生の運転で、北京白雲觀を訪れることが出来た。ここで、事前に紹介して下さっていたお陰で、道医の診察を実際に受診することが出来た。さらに今後研究で使おうと考えている「修真図」と「内景図」の拓本を入手することが出来た。また汪桂平先生は、王卡先生の遺著『敦煌道教文獻合集』を編集集中であり、11月に日本の蔵書を調査するため来日するとのことであった。調査のお手伝いをする約束をした。帰国した現在、来日される際の、事前申請などを手配している。この度、数多くの優れた研究者たちと交流できたことを大変幸福に感じている。